



1956-1962

佃先生登場！ 新人戦初優勝を飾る。



新人戦の後で。18期の先輩と。

ヒルケルさんの遺したサッカー部創設以来の貴重な写真の数々を追悼写真集なりという佃先生の年来の希望が、若いOB諸兄の手で構想を新たに、「六甲サッカー部50年史」として今、発刊される。嬉しい限り。30年昔の少年時代を思い起しつつ、お二人について少し語ろう。

ヒルケルさん——草創期から「六中」のそしてサッカー部の物的環境づくりは、偏に修道士ヒルケルさんのお蔭である。学校の施設は逐次改善され30年前とは様相を大きく変えたが、それでも校内のあちこちに未だに、彼の手になる製作品がドイツ職人の気骨をうかがわせて、実にどっしりと腰をおろし

ている。煙草をくわえた作業着姿のヒルケルさんが彷彿と思い出される。長い日本滞在にも拘わらず、専ら物づくりに携わったせいも、彼の日本語はお世辞にも上手とは言えなかった。我々、小僧共が何か失敗をしでかす度に、その太った大きな体から発せられる言葉は修道士らしからぬ「アホ！」の一言であった。そして我々も又、独特の抑揚で「アホ！」と口まねして、それでもうすっかり許されていた。週末の試合には大概、ごついジープを駆って応援に来てくれた。六甲卒業後、大学の休暇などの折に、同級生と共に六甲を訪ねると、決まって彼の部屋に溜ってワインを御馳走になった。そのワイン

が極く安いものであることは後で知ったけれども、その時の我々にはこの上なく豊かな味であった。彼の温かさが若者たちを包んだ。ヒルケルさんから何の授業を受けた訳でもないし、お説教一つ聞かなかったけれど、人のために働くことを理屈抜きに教わった。それを言われると却って、ほのぼのと素直になってしまうあの「アホ！」を今の六甲生たちにも聞かせてやりたいと痛切に思う。

佃先生——ご存命の先生についてあれこれ書くのは難しいが、「100年史」ではこちらにも間に合いそうにない故、何とか今、修飾語抜きで書いてしまおう。我々の前への彼の登場は私の中3

の時、彼が大学4年生の教育実習生としてであった。今よりまだ一層スリムで太ももの筋肉がクキッと盛り上がり、キックの示範は見事であった。石を投げるのとスライディング・タックルの練習が得意で部員たちは彼がグラウンドに姿を見せる前に、自主的に小石の除去作業に励んだ。その翌春、戦々恐々の我々の心配を他処に彼は専任教員として母校に戻った。それ以来、楽しかるべきスポーツも刻苦忍従の鍛錬に変容し、部練帰りの坂道はサッカー部員の怨嗟の声で満ちみちた。その甲斐あって神戸市優勝。ところがこの時、鬼の監督、敵の雨霞の攻撃を健気に耐える教え子たちを正視すること能わず、グラウンド隅の陰から秘かに観戦していたとか。余勢をかって近畿大会にも出場し、2回戦は当時、大阪の雄・明星高校。安宿での昼食に出たカレーライスが試合中にこみ上げて完敗したのが高1の夏の辛い思い出。当時間も練習は週2日程で、指導に飢えていたせいだろう、反発しながらも熱血先生の話の割合よく聞いた。昨今の周りの学校の異常な練習ぶりに対して、六甲生の賢明さと素直さ、佃・市川両先生の情熱、部運営と練習内容の合理性がうまく噛みあえば、県優勝は又、そう無理なことではないと思うのだけれど、如何？因みに、しんどいサッカーを楽しくやるには、やらされることから自分で主体的にやるという意識の転換が肝要か。佃先生を描くはずが現役諸君への期待になって恐縮の至り。最後に、六甲時代を共感し合った同期の仲間を紹介したい。

港 中1からオヤジの貫祿。外見に似ず繊細なプレイの技巧派。キャプテン。佐野一足なが少年。筋肉なしでストッキングとまらず。普通人の倍幅ストライドのドリブル抜群。

姫野 中盤の要。器用なのにここ一番大空振り。スタミナ不足。投石よけの名手。

山田 一人ぼやきのテクニシャン。スタミナ十分、ガニ股でサイドキックとセンターリングの職人。

山本 たえず投石の的。よって佃流スライディング・タックル免許皆伝、下級生指導の専門家。

響尾 スタイリスト。メガネをかけたゴールの守護者。ファインプレーの後はたいがい大チョンボ。

井田 猪突・慎重の理想的バック（自称）。実はブキッチョでロングキック一本槍。

岩島 ドロップアウト代表。間違っに入部。極上ブキッチョ。ツクさんの石に追われて(?) イエズス会へ。

[井田 国敬]

六甲時代のサッカーと言えば佃先生の厳しい練習を思い出します。私はフォワードをやっていたのですがボールを持つと「逆へ蹴れー」「逆つつ込めー」という練習を繰り返し繰り返しやりました。

時々石も飛んで来ましたし、「お前サッカーやめてしまえ」ともよく言われました（後輩諸君もそうでしたか?）。おかげで我々の同期はすべて大学でも体育会に入りサッカーを続けました。大学での練習もさほど苦しい

とは思いませんでした。何ととっても気持ちよかったのは大学生になって後輩をしぼりに行ったことでした。
[港 俊吾]

わが19期の面々はそれほど卓越した選手はいなかったが、六甲サッカー部創立以来の快挙を2度達成した。神戸市の新人戦での初優勝と近畿大会初出場である。並の連中でも叱咤激励されれば何事も出来るということを学んだことは有り難いことである。

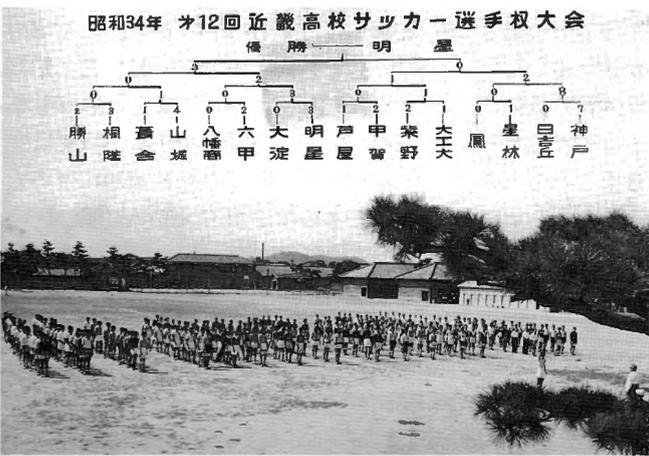
[姫野 富治]

姫野君 先日貴兄に久しぶりにお会い出来て大変うれしかった。同期の人達にも久しく会わないが、機会があればよろしくお伝え下さい。貴兄を始め同期が留守宅の妻に電話をかけて激励してくれて感謝しています。

当方は本年中に帰国予定です。本日バンコックに帰任します。

[1993年3月26日 山本 正弘]

「我々サッカー部の記憶を思い起こせば、自然と当時のロケーションが浮かんてくる。六甲ケーブル下までのランニング、佃先生の赴任に始まる地獄のような夏の合宿、満足なグラウンドとてなく、第1グラウンドの桜の樹にゴールネットを張ったこと、近畿大会初出場等々、30数年前の先輩、我々、後輩たち、それぞれ個性のあるキック、走り方、まだまだ私の脳裏に焼きついている」
[山田 恭三]



昭和34年 第12回近畿高校サッカー選手権大会

優勝 明星



六甲高校 (兵庫)

監督 佃 武夫 部長 友方 茂
主将 谷垣 武夫

氏名	学年	位置
G.K 山本和彦	2	Sub (守門)
R.B 太田省吾	2	審判員
L.B 野野田 2	2	審判員
R.H 井田国致	1	有本橋文
C.H 北村正章	2	佐野功成
L.H 姫野富治	1	大木真一
R.W 山田恭三	1	岡田吉弘
R.I 米正益隆	1	
C.F 吉川 勝	2	
L.I 吉田靖彦	2	
L.W 港 俊吾	1	

六甲初優勝
市内高校新人サッカー
第三回神戸市内高校新人サッカー大会
大会終了後、四日後一時半から神戸市第1グラウンドで六甲高対御影高の決勝戦が行われ六甲が3-0で快勝、初優勝した。